

植物園に関連する期待や思いあれこれ

石 沢 進

植物園に関する期待、在り方、活用、思い出など、最近「新潟県立植物園の友の会」設立準備会に携わる機会があり、様々な事柄が頭の中に巡って、改めて「植物園」とは何かを考えている。植物の保護に関連しても重要な施設であることから、この機会に本冊子に取り上げてみたいと思った。植物園のあるべき姿が整理された訳ではないし、特に方向性に係わる信念が固まったわけでもない。植物園に関する様々な事柄や疑問をあれこれ考えてみたい、そんな曖昧な気持ちから思いつきのままを記録して大方のご教示を仰ぎたいと思っている。植物園友の会は2004年度から募集して、軌道に乗せて行く予定であり、本会会員の方々も入会されて活躍していただければ幸いである。

● 公的な植物園の入園料

昔から図書館には、入館料をとるところがない。広く住民に開かれた公的機関であり、機能的には同じような施設と思われるが、無料開放されている植物園は少ないようである。運営に多くの経費がかかることに困っていると想像されるが、多くの方々に見て学んで頂くために無料開放を期待したいものである。美術館も入館料を払って入るところが多い。公的な施設であるならば、入館料を取らないことが望まれる。

入園料を徴収しない場合、問題点が多いことも考えられる。不特定多数の入園は、園内の施設の破壊や展示物の損傷や盗難が多くなったり、監視するための園職員の強化による経費増大が必要になるなど、問題点も出で来るであろう。

しかしながら、入園者の少ないことによる運営経費の削減につながるような体制は避けてほしいものであるし、入園者が少ないからといって経営努力が足りないと思われがちで園職員を削減するのも困る。植物園は入園者の多少に関係なく、図書館と同じく、「地域の文化を支える必要な機関である」との位置づけが要望される。また、植物園充実することにより、「人々の生活を支える基盤に、植物なくしては成り立たないこと、地球上から様々な植物の絶滅は、やがて人の命に係わること」などを広く一般の方々に発信する基地になってほしいと思ったりしている。

● 様々な植物園

植物園には、植物を楽しむために見せる植物園、社会教

育の場としての機能を持った植物園、野生植物など保護するための基礎資料を蓄積する植物園、植物を研究するための植物園、あるいはいくつかの機能を兼ねた植物園がある。

公的な植物園は「植物を楽しむために見せる植物園」だけに徹するような施設であってはならないと思う。少なくとも教育や野生植物の保護に係わる機能を持った植物園であってほしい。入園者に対するサービスも大切な職員の業務であるが、教育や野生植物の保護のためには、職員の研修や職員による研究を行い、その結果を広く一般の方々に反映できる体制が望まれる。勿論、いろいろな業務を増やして過剰な労働にならないように、ゆとりをもった運営が必要である。

● 植物園を囲む周辺環境

植物園だけが単独で、孤立して植物の情報を社会に提供するのではなく、他の関連機関と共同して対応した方が、より深く情報の提供が可能である。たとえば、大阪市では、植物園に隣接して自然史博物館が設置されている。

また、植物園をとりまく自然環境の存在も大切な要素となるであろう。つまり、植物園に植栽された植物と隣接している周辺に分布している植物が同時に観察できれば、訪問する方々に大きな魅力を与えることになるだろう。

最も理想的な植物園の周辺環境としては、隣接して植物資料館があり、さらにその周辺に自然に接することが可能な野生植物の自生地が存在することにある。たとえば、石川県加賀市の朝日植物園は、自然状態のままの一部に植物を植栽し、その中に資料館を備えた施設であり、理想的なものに近い。野生植物と植栽された植物との遺伝子レベルの攪乱の可能性もあり、ある程度の配慮も必要であろうが、訪問者には魅力的である。

そのような観点から新潟県立植物園は、背後に新津丘陵地があり、立地条件としては、理想的な環境にある。残るは植物に関する資料館を並立させること出来れば最高である。植物に関する情報の発信基地として充実するには、最高の環境条件下にあると思う。将来に向けて大きく発展することを切望する。

● 雪国植物園と独自の活動

長岡の雪国植物園の園長さんの設立に至るまでのお話し

を伺う機会があり、ボランティアの方々の献身的な協力によって作りあげたとのことである。ここは植物の自生地をそのまま生かした植物園で、雪国の植物を自然に近い状態で観察出来る点では魅力的であり、特色あるところであろう。自生地以外の植物が多くなるとその魅力は少なくなるように思う。地域の自然そのものを売り物にした植物園として、益々の発展を期待したい。

● 新潟県内の植物園

新潟県内では、植物に関する公的機関が少なく、植物園も例外でなく、目ぼしいものがなく、寂しいことである。自然との触れ合いの場として、妙高高原ビジターセンターと入広瀬村浅草山麓エコ・ミュージアム（みどりーむ入広瀬）があり、自然の豊かなところに作られた施設である。自然を観察する点では機能を果たしていると思うが、基礎的な資料が十分蓄積しているわけではない。

また、岩船郡朝日村には森林研究所があり、そこでは、樹木の見本園が整備されている。広く宣伝して一般公開しているわけでないが、見学は可能であろう。

県内で植物園と呼んでいる所として、前項の雪国植物園があり、また、佐渡の羽茂に「佐渡植物園」がある。羽茂町の管轄にあり、確か神社の境内で、山裾に様々な植物を植栽し、一部に集中管理施設があったように記憶している。また山裾から山の斜面にかけて一部植栽されている。山に入れば、羽茂付近の自生の植物を観察できる点では魅力がある。

栃尾市にはかつて稲田豊八氏が自力で植物園を、お寺の山に建設したことがあり、一度尋ねてみたが、整備の途中であり、入園者、特に子供達に植物の名前が分かるように配慮していた。残念ながら完成するに至らず、その後は元の山の自然に戻ったのではと知っている。

県内には森林公園と称して、山中に一定の場所をその名称のもとに管理しているところはいくつかある。例えば、鹿瀬町赤崎山の森林公園、津南町山伏山の森林公園など訪問したことがあるが、特別な施設を設けているわけではなさそうである。両公園とも共通しているのは、高木を残して低木を伐採して見通しを良くしている。森林とは、高木と低木、さらに下層に草本がある姿であるが、それを破壊して森林公園とする行為が理解し難いところもある。折角の公園であるなら、その在り方に検討の余地がありそうに思う。

● 植物園ネットワーク

上記のように県内には、植物に関連した様々な取り組みがなされている。しかしながら、相互の交流や連絡は、極めて薄いように思われる。相互の連携がとれて、互いに活用し合うような緩い組織作りができれば、県内における植

物に関する情報提供が出来るし、植物に関心をもつ機会が多くなるように思う。それぞれの持ち味を生かした活用を模索する必要があるであろう。

● 特色ある植物園作り

荒川町には、運動公園があり、その中に樹木を植栽して「特色ある 公園作り」を進めている。荒川町付近で北限となる常緑樹が分布することから、それらの種子を集めて「常緑樹を主体として公園」を目指して、1997年から取り組んでいる。大きな敷地があるので、その中に主として県内に分布する種類を育て、見本園にする試みを進めている。導入する樹木の採集地を明記し、将来は学術的にも活用できるような植物園としての機能を持たせる方向を目指している。このような取り組みは意義深いことであり、将来に大きな期待を寄せたい。

荒川町の同じような取り組みでなくとも、各市町村ごとに人の近づき易い場所に「郷土の森」と称して一定の地域を人為的にあまり手を加えないで温存する所を残すことが重要なことと考えている。つまり、それぞれの地域の植物の分布上での特色が「郷土の森」に集約することになる。ほとんど放任状態で自然の推移にまかせておくことにより、植物からみた地域の特性が明らかになる。経費もそれほど掛ける必要もないで、地域の自然植生の見本林になると確信する。

● 植物園の活用・利用

各地に特色あるミニ植物園が、多く作られることにより、そこを基盤とした活動も可能になるし、定期的な植物園祭りなる企画も可能である。植物園を通じて相互の連携を保ち、それぞれの地域の自然の豊かさの一端を知る場となるであろう。

● 植物園めぐり

各地の植物に関する施設の充実により、それぞれの地域の植生の特色を見て歩く、植物園めぐりができるようになれば、広く一般の訪問者も増加する。上記植物園ネットワークにより、多くの情報の提供ができれば、益々、植物に関心のある人々が増加し、楽しみも増加するように思う。このような取り組みが夢物語でなく、実現を目指して活動するスタートができれば望外の喜びである。そのことにより、新潟県の自然の豊かさや植物の保護に大きく寄与するものと考えられる。本会員の中に立ち上がって行動を起こす方々がおられれば集結したいとも考えている。

● 全村植物園構想

私の郷里は長野県下水内郡栄村であり、大きな面積を占めている。しかし、戦後森林が広く伐採されてしまい、広

域にわたる自然状態でのブナ林は少なくなり、かなり寂しい状況になっている。特別な産業もなく、村で誇れる物産も少ない。村の最大の魅力は、伐採されているが、自然状態で残されている地域もある。幸いそれほど大規模に自然が破壊されてもいないので、村の最大の魅力は豊かな自然である。その村の将来のあり方として、全村植物園構想のもとに村作りが出来ればと思っている。機会ある度にその構想を実現に向けてほしいと要望しているが、まだ、具体的な動きはない。将来にむけて、実現のために努力して行きたい。大方のご支援をお願いしたい。

● 植物園友の会の役割・将来構想

友の会の会則 第二条 (目的)

「本会は、新潟県立植物園が行う普及啓発、教育、調査研究活動等に賛同協力し、植物や環境保全に関する知識を深め、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする」

そのための具体的な取り組みが今後必要になる。新たに設立される友の会の会員からの意見を求められることもあり得るし、植物園から期待されることもある。

普及啓発、教育、調査研究活動と言葉で簡単であるが、内容は複雑多岐にわたる。会員の中にも得意とするもの、苦手とするものがあると思うので、すべての会員が同じ目的で協力するのは無理であろう。それぞれ得意とする分野の

方々が集まって協力する態勢が取れば、得られる成果は大きいものになるであろう。植物園に協力する「分科会」のような組織ができれば、機能的になるであろう。

一方、新潟県は南北長いので植物園に近い方と遠方の方とで協力の方法にも違いがあるであろう。新潟県立植物園が新潟県内の植物関係の情報センターとしての役割を担うことになれば、県内全域に参加できる会員が望まれる。そのようなことを考えていると将来、友の会の支部制度「友の会支部会」も必要なことになろう。

さらに「分科会」と「友の会支部会」との連携により、それぞれの地方で出来る活動も考えられる。例えば、調査研究活動の分野では、植物の地方名調査グループ、巨木調査グループ、野生植物分布調査グループなど、多様な調査対象を取り上げると、分科会と支部会の活動範囲も広がり、活発になると期待される。

植物園に係わる事柄を羅列的に取り上げたが、新潟県内に植物関係の情報センターがないことから、植物園に期待することが次々と膨らんでくる。植物園に対する夢を大きく展開して、現実には近づけることが出来ればと考えている。そのよう意味から、本冊子でも今後、植物園に関する話題、思いつき、夢などを掲載してみたいと思っている。会員の方々のご意見も寄せて頂ければ幸いである。

新 潟 日 報

2003 12 19

日報抄

昭和から大正、明治ときかのぼるほど、奇人のスケールは大きく自由奔放になっていくという。その通りだと、高知市の牧野植物園で「日本植物学の父」牧野富太郎の遺品を前に、感嘆するばかりだった▼目に付いたのが高利貸から借りた金の控えの数々。生涯、経済観念が身に付かない人だった。高知県の裕福な造り酒屋の跡取り息子に生まれたが、洋書の購入や植物図録の出版に金を注ぎ込み、三十歳で家業を破産させてしまつ▼人生を一変させる試練であった。破産直後に東京大学の助手になったものの、俸給はわずか十五円。研究を続けることはおろか、妻子を養つこともおぼつかない。学歴は「小学校中退」。昇進も昇級も、学歴の厚い壁に阻まれていた▼それなのに、金銭感覚は何も変わらなかった。

た。相変わらず古今の文献を買いあさり、全国の野山を駆け回る。借金は雪だるま式に増えた。でも不思議だ。窮地に陥るたびに、膨大な借金を肩代わりしてくれる理解者が現れたのである▼私生活は切り詰めた富太郎の服装は着古した和服に深ゴム靴。奇人そのものの格好だったろう。だが、改まった席には借金であつた。そんな精神のダンディズムを愛する人々に支えられて、日本の植物分類学の基礎は築かれた▼大漢和辞典を編纂した諸橋轍次もスケールの大きな奇人だった。三十万以上の地名を網羅した大日本地名辞書を膨大な借金を抱えて編纂したのは、北蒲出身の吉田東伍である。文明開化期の南国土佐と雪国新潟に共通した精神風土があったとしたら、それは何だろう。宿題を抱えた思いで植物園を後にした。